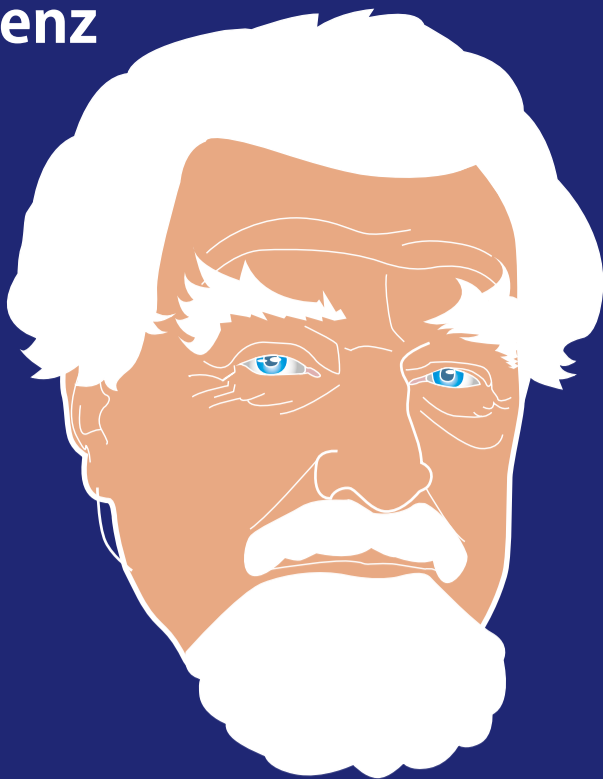


Konrad Zacharias Lorenz

(1903.11.7 - 1989.2.27)

カーネル・サンダース
じゃないぞ!!
(いちおう突っ込みを
入れてみるぴよん。)



ヒヨコのわき道

ほら、君もこっちに いらっしゃい

第56回 比較行動学。 我思う、ゆえに我あり？

「比較行動学とは何か？」

突然ですが、比較行動学をご存じで？

比較行動学とは、動物行動学と訳される場合もありますが、様々な動物を研究対象として動物の行動を研究する学問です。また、ヒトに近い動物を研究対象とすれば、研究成果からヒトの行動や心理について一定の考察も可能になるでしょう。動物がどうしてある行動をとるのか？それはどんな仕組みで可能となっているのか？動物に興味がある人、動物を飼うのが好きな人は、自らと共に暮らす動物たちをより良く理解するために、一般向けの比較行動学についての本を手にする機会も多いのでは？今回は、比較行動学について紹介してみます。

「すりこみって何？」

オーストリアのコンラッド・ローレンツ先生は、1903年生まれの偉大な比較行動学者です。

彼の業績の中で特に有名なのが、「すり込み」の発見です。

例えばアヒルの卵を人工的に孵化させ、生まれただけの雛鳥に電池で走る車のおもちゃなど、動き続けるものを見せると、雛は懸命に後を追いつけるようになります。例え本当の親のアヒルと、似ても似つかない形の物であっても。雛はいつまでも追いかけて続けるのです。これをすり込みと呼び、生まれて初めて見た動くものは本来「親鳥」であり、その後を追えば安全に親鳥と行動を共にできるという、目的にかなった生まれつきの行動なのだといわれます。結果的に通常のアヒルの兄弟たちは、餌場へ向かう親鳥の後ろに隊列をなして進むこととなります。

実際は、ローレンツ先生は動物たちが好きで、自宅で沢山飼っている動物たちのうち、ハイロガンの雛たちに自分を親鳥と間違えられた経験（必死に追いかけてくる）から、すり込みという現象に気付いたということです。きっと雛が卵の殻を抜け出し、歩き始めるのを長時間観察するうちに、つい自分の姿を雛に「すり込んでしまった」のでしょう。ローレンツ先生は本当に動物が好きで、研究手法は専ら観察。手術で動物を傷つけたり、解剖したりすることは好まなかったそうです。ローレンツ先生は1973年にニコ・ティンバーゲン、カール・フォン・フリッシュと共にノーベル医学生理学賞を受賞しました。

「生まれつきの行動？」

動物が親から教わることなく、経験から自ら学ぶこともなく、生まれつき行える行動を、「本能的行動」とか、単に「本能」と呼んだりします。また、個体の意思や思考とは関係なく、特定の刺激を受けることで引き起こされる行動や身体の動きは、「反射」と呼ばれます。

単純な行動しかとらない原始的な動物は、専ら「反射の連鎖」で目的を達していると考えても、あまり違和感はないでしょう。

哺乳類に比べると脳があまり発達していない鳥類や爬虫類は、刺激に対して適切な本能的行動を組み合わせることで、合理的な行動をとれていると考えられています。かつてはこの考え方をある意味応用し、唯物論や機械論の立場からヒトにも当てはめて見せた研究者がいました。

それはジョン・ワトソン先生が唱えた「古典的行動主義的心理学」とも言うべきもので、「心」というものを前提にしなくても行動について研究可能だということです。自由意志なんて単なる錯覚であり、行動とは遺伝的要因と刺激の組み合わせで決定されるという考えです。

実は「私」には心も意思も無かった？ではそう錯覚しているのは誰？納得できるヒト、いるのかなあ？

「何の為の行動か？」

そもそも動物の行動には、どんな意味があるのか？何の役に立つのか？いくつかの一般的な考え方があります。

ひとつ目は、「種族を繁栄させるための行動」であるということ、より多くの子孫を残せる行動こそ合理的であり、そのような行動が進化するのだと。

別の考え方は、あくまでも自分のためだけに行動するのだという考え方です。ここで言う「自分のため」とは、自分の直系の子孫を、より多く残すためと考えることが出来ます。

そしてもう一つの考え方は、遺伝子自身が生き残るために行動を起こしているのであり、私達の身体は「遺伝子の乗り物」に過ぎないという考え方。親族と共に暮らし、リーダーに服従するオオカミのような動物の、他の個体に利する行動は、この「遺伝子の乗り物説」でよく説明できるよう。自分と同じ遺伝子を持つ可能性の高い親族や兄弟を助ければ、自ら繁殖できなくても、結果的に自分の持つ遺伝子が生き残る確率が高くなるということですから。

どれも一理あると思うのですが、私には何となくすっきりしないのです。

「瞳の奥に。」

昔、私の家で飼っていたイヌは、もちろん私に良くなついていたのですが、夜眠るときは、普段食事の世話などを行っている他の家族の寝具に潜り込んで眠っていました。ところがある日、体調を崩した私が横になっていると、彼は私の部屋の入口に寝そべって、なかなか動こうとしなかったのです。家族は笑いながら、「ご主人様を守っているつもりなんだ」と評しました。

当時、比較行動学を学んでいた私の頭の中には、行動主義や、遺伝子の乗り物説など、彼の行動を解釈するためにいくつかの客観的論理が思い起こされました。それにもかかわらず、私には、ある強い確信が芽生えて止まなかったのです。そして彼が思い出になってしまった今でも。

私を見つめていた、あの茶色い瞳の奥には、きっと誰かが居たのだと。